醸造伝統の灯

消えた酒と白壁

約190年前の江戸時代後期、酒造りの文化が御船の地に芽生えた。そこから数多くの造り酒屋が生まれ、御船川沿いに軒を連ねていた。しかし昭和という激動期は、この町の醸造伝統さえものみ込んだ―

酒伝来と肥後初の酒銘

御船で酒造りが始まったのは、江戸時代後期。2丁目の雑穀屋が酒造りに手をつけ、この町で酒造りの基を開いた。その主人の名は、増永茂三郎といった。それからいくつもの造り酒屋が生まれ、巨倉をつくっていくことになる。

当時、雑穀屋や伊津野屋、米屋、萬屋といった商家が酒造りをしていたころは「酒株」があり、造り酒屋ごとに製造高を定め、毎年冥加金を納めた。新たに造り酒屋を始める人は、誰かの「酒株」を譲りうけなければならず、酒造りは一種の独占事業ともいえた。

文政3年（1820）、上荒瀬に角雑穀屋という酒造が創業した。雑穀屋の分家である主人の増永三左衛門は、灘（兵庫県）から杜氏を連れてきて、初めて灘流の辛い酒「清酒」を造らせた。

このころ、酒には銘柄がつけられていなかったが、三左衛門は「八ツ橋」と名付け売り出した。これが肥後で初の酒銘であり、最初に清酒造りを手がけて、売り出したのは御船だったともいわれる。

明治に入り、「酒株」が廃止されると誰でも酒造りができるようになり、酒造りブームが生まれる。

明治32年（1899）、熊本県長者番付には80位までに御船から10人が名を連ねた。そのすべてが造り酒屋であったほど、もうかり繁盛した。造り酒屋延べ29軒のうち、最盛期の大正末期から昭和12年ごろまでは、12軒の造り酒屋が軒を並べていた。

時代に翻弄された酒造元

酒造りの好況は、大正末期ごろまで続いた。だが昭和はじめの世界恐慌後、全国的な不景気の風が吹き荒れ、御船の造り酒屋も厳しい経営状況に直面していった。

そして昭和12年、国策の重税で酒造元は経営が行き詰まる。80銭から1円の清酒を半値の40銭程度で売り出す時代が訪れ、さらに不況と経営不振で、御船の造り酒屋は廃業や倒産に追い込まれていった。昭和20年、御船の造り酒屋は3丁目の常薫酒造と菊の露酒造㈱の2社となっていた。

常薫酒造は、昭和13年に杉田酒造場を買収して昭和24年の起業。銘酒「常薫」を造っていた。

しかし、昭和30年代に入ってから登場したビールで消費が低迷。日本酒の売り上げ不振と、後継者不足も追い打ちとなって、昭和54年の暮れに廃業した。

一方、菊の露酒造㈱は明治27年（1894）の創業で、当時は田中酒造場といった。

太平洋戦争中の昭和19年、御船には、田中酒造場、上田酒造、松永酒造元が残り、醸造伝統を守っていた。しかし、国の企業整備で3社は統合会社となり、菊の露酒造㈱へと改称した。そして、太平洋戦争の激動期を乗り越えたのだった。

そんな菊の露酒造㈱も昭和50年、年々消費が低迷していく清酒の協業化に踏み切る。城南町（現熊本市）の美少年酒造で清酒の集約醸造を図って、焼酎のみを製造していたが、昭和56年ごろに廃業した。

こうして、約2世紀続いた御船の醸造伝統の灯が完全に消えた。そして、上荒瀬に残っていた上田酒造の「酒蔵」が昭和58年に、3丁目の「酒蔵」が昭和60年に河川改修で解体され、白壁の歴史は幕を閉じたのだった。

↑昭和20年代後半、酒造りにも機械が導入されて製品の瓶詰作業をおこなう酒造元の従業員

↑昭和20年代後半、五尺桶に代わって酒の貯蔵に使われたホウロウビキの大型タンク。直径約240㌢、高さ約300㌢

こらむ Column　御船が生んだ「酒博士」

「酒造の町」と呼ばれた御船の自慢は、日本一の酒博士を生んだこと。農学博士・住江金之だ。

住江は、明治22年(1889)6月、上荒瀬にあった角雑穀屋の造り酒屋の四男として生まれた。大砲造りの増永三左衛門のひ孫にあたる。

大正2年(1913)、東京大学農芸化学科を卒業。大正10年(1921)、東京農業大学教授として酒造りの研究に入った。以来50年間、東京農大教授として、「世界の酒」「日本の酒」「酒の浪曼」「総合飲食加工品法」など、数多くの著書を発表する。

一方、文化人として随筆「酒のさかな」、歌集「うま酒」を残し、熊本日日新聞に連載随筆「勝手放題」を寄稿するなど、きさくな「酒の博士」として親しまれた。

そんな「酒の博士」の住江は、2、3年に一度は必ず御船に帰郷した。幼いころ泳いだ御船川の淵、戦争ゴッコした丘、あの森、この山、歩き回って追懐したという。昭和40年、思い出の城山公園に登ったところ、子どものころによく遊んだ天満宮がなくなっていた。そこで子どもの遊び場にと大金を寄付し、神殿が再建された(写真右→)。

昭和41年11月、勲三等旭日中綬章を受章。昭和47年8月、83歳でその生涯を終える。

昭和54年7月、町文化財に指定された新橋上流の「酒蔵」。長さ14.5㍍、奥行き7.3㍍。「白壁の酒蔵」の保存と改修を望む声から補修工事が行われたが河川改修で姿を消した

本町通りから御船川沿いへと通じていた上田酒造場横の路地と常薫酒造2階の仕込み蔵倉庫、酒造りの道具（右上中下・松永忠勝さん提供）